

「通訳教授法ワークショップ 2003」報告

稲生 衣代
(青山学院大学)

日本通訳学会教育 SIG 「通訳教授法および教材開発研究プロジェクトチーム」主催で、2003年8月31日(日)～9月1日(月)の2日間、青山学院大学(渋谷キャンパス)のCALL教室にて「通訳教授法ワークショップ 2003」が開かれた(資料参照)。今年に通訳理論をふまえた発表が多数を占め、熱い議論が戦わされた。各セッションの概要は以下の通りである。

□Session 1 「CALL システムによる通訳訓練について」(染谷 泰正)

青山学院大学では2003年4月にフルデジタル仕様のCALLシステムを全学的に導入し、現在、渋谷キャンパスで4教室、相模原キャンパスで16教室が稼働している。本発表では、まず、このCALLシステムの概要の説明があり、続いて発表者が行っているCALLシステムを使った通訳授業の内容紹介があった。

発表者が行っている通訳コースの授業では、すでにプロジェクトチームのメンバーにはCD-Rで配布されているオンライン教材「英語通訳訓練法入門」および「通訳訓練教材データベース」が使用されているが、この教材が実際に授業でどのように活用されているのか、また、どのような利点および問題点があるのかについて、詳しい説明があった。発表を受けて、これらの教材を今後プロジェクトチームのメンバーが自由に利用できる共通教材として育てていくために、どのようなことが必要かといった点について議論が進められた。質問も、学生のパソコンリテラシーの問題から、ノートテイキングの理論および指導法まで、多岐にわたった。

□Session 2 「初級レベルの学生へのシャドーイングの導入方法についての一考察」(田中 深雪)

田中会員の発表では、高校から大学の初級レベルの学生に対してシャドーイング訓練を導入するに当たって考慮すべき点について、(1) 使用教材 (2) 指導方法 (3) 指導者の役割などの観点から議論し、その上で、シャドーイングの何を評価するか(正確さ・流暢さ等)および学習者(とくに初心者)が躓きやすい点はどこか、といった

INO Kinuyo Yoshida, "A Report on the Interpreting Pedagogy Workshop 2003"

Interpretation Studies, No. 3, December 2003, pages 140-146.

(c) 2003 by the Japan Association for Interpretation Studies

点について話があった。また、シャドーイング練習におけるコロケーション知識の必要性についても言及した。参加者からは、シャドーイングの指導に際して「極端な日本的発音は是正の指導が必要であろうが、どこまで発音にこだわるべきなのか」といった点や、「内容理解」についてどこまで指導を徹底すべきか、などの質問が出され、活発な議論が展開された。

□Session 3 「通訳訓練におけるコンテキストについての指導」(本郷 好和)

コミュニケーションでのコンテキストの考え方の理論的な背景と、通訳クラスでの導入指導の一例が紹介された。元来、コンテキスト共有が乏しい中で行うことが多い通訳では、コンテキストを効果的に把握し、活用することが当事者間の意志疎通の成否を左右する。しかし、一般に通訳訓練においてはコミュニケーション・コンテキストの位置付け、特性、分類、訳出上での考慮点や活用方法等について体系的に取り上げられることが少ない。コミュニケーションにおいて、常に「テキストと共にある」コンテキスト情報は、意味の解釈に枠組みと制約を与え、テキスト以上に重要な役割を果たすことも多い。従って通訳者は、言語的、心理的、状況的、社会・文化的文脈に基づく多彩なキュー（手掛り）とその特性をしっかりと認識しながら通訳することが求められる。

このような考え方に基づく具体的な指導例として、以下のような内容を含む国際基督教大学での授業内容が紹介された。

- コンテキストの重要性についての認識向上（通訳現場での事例紹介、visual や例題の利用、ディスカッション）。
- 理論的枠組の紹介（コンテキストの位置付け、意味づけ論、コンテキストの種類とさまざまなレベル、意味の階層的上下関係）。
- 通訳実践における方略の紹介（コンテキスト活用での入力側と出力側の意識的切り分け、コンテキスト情報の獲得手段、5W1H への注目、マインドセット採用とその切替えの重要性、多様な contextualization cues の活用）。

また、訳出指導においては、生徒が通訳を“transcoding”ではなく、コンテキストを把握した上での目的に合ったコミュニケーションの実現と捉えられるよう教材導入の工夫をする必要性が強調された。

□Session 4 「認知意味論による通訳・翻訳の訳出指導」(河原 清志)

通訳「教授法」を語る上で大切なのは、学習者の視点に立った「学習法」がいかにあるべきか、という点だ。そこで、今回は語をいかに訳出したらいいのかということに関して、学習理論をもとに教授法を分析、検証した。ここで採用したのが認知的スタンス (cognitive stance) である。このスタンスの特徴は、(1) 心的表象、(2) 情報

処理、の2つだ。通訳・翻訳の学習においてもわれわれはどのような心的表象を獲得していくのか、ということについて概念形成論（差異化、一般化、典型化）をベースに認知意味論（語のコアミーニングの獲得と多義の派生原理）から考察していく必要がある。また、実際に通訳・翻訳をする過程における情報処理のあり方を反映させて、どのような学習をすればその処理法が獲得できるのかについて、言語の線条構造性とオンライン処理、という観点からこれまでの通訳・翻訳における情報処理の過程を振り返り、学習理論に応用した。

具体的に今回は、基本語彙の訳出に焦点を当てて検討した。基本語彙は「意味が複雑」で学習しにくいのではなく、「意味は単純であるが、曖昧である」のでこれまでは学習し辛かった、というのが認知意味論のスタンスだ。そこで、曖昧、つまり、多義の構造を詳らかにして、多義の発生メカニズムを学習理論・教授法に取り込み、具体的事例に当てはめつつ、訳語の選択メカニズムについて体系化していけば、より緻密な学習法、教授法が提示できるのではないかと、この見解から、試論として、品詞別に多義とその派生メカニズムを体系化し、具体的な訳出指導のあり方について、展開した。これまでは、具体的な訳出法を、通訳・翻訳技法とか、方略として位置付け、思いつくものについて列挙していくという形が主だった。そこで、今回の試みでは、通訳・翻訳における訳出という言語運用の面と、通訳・翻訳学習という習得・学習とを有機的に一体化した議論をすることで、学習理論と現場での方略との架橋をうまく図って、より精緻な通訳・翻訳教授法を確立する一助になったことを期待する。

□Session 5 「通訳訓練手法を応用した中国語会話クラスの口頭練習」（永田 小絵）

発表者の勤務校では、従来、会話の授業は主にネイティブの教員がトピック会話を中心に指導してきたが、学生の積極性や習得レベルの個人差が大きく、必ずしも期待した成果をあげてこなかった。そこで、昨年度から週2コマの授業を日本人教員（発表者）とネイティブ教員で1コマずつ分担し、日本人教員はLL教室を利用したリスニング&スピーキング練習を担当している。本発表では、その新しい取り組みについて詳細な報告があった。

授業では、開講時に学生に「予習（宿題） 授業 復習 小テスト」という授業の流れを十分に理解させ、あわせて予習・復習の方法も明確に指示している点や、クイックレスポンス、セグメンテーション・リスニング、リピーティング、シャドーイングなどの通訳訓練手法を適宜組み合わせ、訓練が単調にならないよう配慮している点がとくに注目された。また、LL教室における具体的な授業の進め方や、外国人教員との連携という観点からも示唆に富む発表であった。

□Session 6 「機能文法の視点からの訳出指導」（渡部 富栄）

発表者が担当する通訳中級コースの訳出指導で実践している「機能的構文解釈」（＝

統語の枠組みの中で意味をどのようにとっていくか) という点と、統語的解釈を離れた「間接的表現の語用論的な訳出」という 2 点に焦点を当てた発表があった。

発表では、実際に授業に使った資料をもとに、クラスでの指導手順が説明された。まず、翻訳の課題を出し、各自の翻訳力を確認する。文頭からの訳出処理を指導し、毎回 15 分間、新聞、雑誌、書籍などから抜粋したテキストを使ってサイト・トランスレーションを行う。その際、機能的構文解釈的観点から、特に焦点の特定と TL への再現方法、旧情報と新情報の関係と新情報の重要性、結束構造、および結束性の保持に必要な補足等の処理について指導し、文脈に沿った訳出力の強化を図る。次に、通訳現場で無視できない語用論的解釈が必要な間接的表現について説明する。談話の翻訳課題を出し、状況からの焦点の特定と TL への再現、また実際の事例および映画の字幕の例などをとりあげ、間接的表現は話し手の意図を聞き手が受けて初めて成り立つことを伝える。ただし、間接的な意味を訳出する時には、その状況で考えられる意味の候補から誰が見ても合理的にそうだと判断できるものを瞬時に選ぶ必要があることを強調する。

発表の最後に、通訳は人間同士の関わりの中で展開されるために、状況に沿った意味を伝えていかなければならないことを指導の中で強調していると説明された。発表後、通訳教育での翻訳の位置付け、焦点化の指導での生徒の理解、また間接的表現を指導する際の教師と生徒の間での前提の共有の必要性等についてコメントがあった。

□Session 7 「メッセージを伝達するための訳出指導」(柴原 智幸)

発表者は、学生の多くが従来の英文解釈的な英語観から「言語を変換する」ことのみ集中していて、「メッセージを伝達する」ことができていないことから、単なる SL→TL の置き換えではなく、メッセージそのものをわかりやすい日本語で再表現していくことの重要性を強調した授業を展開しており、その具体的事例についての報告があった。また、今後の課題として、「メッセージ」を伝えようという気持ちがあっても英語力(および日本語運用力)不足でそれが十分にできない生徒をどう指導するか、さらに情報を「逃げる形で要約」せず、全部出すように指導するにはどうするかという点について試行錯誤しているとの報告があった。発表後の議論では、「わかりやすい日本語での再表現」という点について、そもそも日本語の運用力が不足しているために理解した内容を適切に表現できないというケースが少なくないことから、改めて通訳訓練の前提となる日本語教育の重要性を確認することとなった。

□Session 8 「セレスコビッチの通訳教育論について」(鶴田 知佳子)

セレスコビッチとルデレーンが書いた通訳教育担当教員むけの教科書 *A Systematic Approach to Teaching Interpretation** の中から、特に日本で教えるときに参考になると思われる箇所を抜粋し、主だった論点を解説した。まずセレスコビッチの提唱する「意

味の理論」(または「意味の解釈」理論)について同書に沿って概説し、続いて逐次から同時通訳訓練への橋渡しをする上での基本的考え方をレビューし、最後に通訳理論が言語学に対してどういう貢献ができるのか、また通訳教育にはどういう要件が必要かなどについても言及した。発表に対して、意味の理論が「listening for sense から導入している点は納得できる」という感想や、同書には「重要なティーチング・ノウハウが詰まっている」といった意見が聞かれた。ただし、「意味の理論」そのものについてはより詳細な理論的検討が必要なのではないか、という意見もあった。

* Seleskovitch, D. & Marianne Lederer (1989) *A Systematic Approach to Teaching Interpretation* (translated by Jacolyn Harmer), Silver Spring, MD: The Registry of Interpreters for the Deaf.

□Session 9 「CALLによるチャンクリーディングのトレーニング」(長沼 君主)

チャンクに基づいた意味処理を、頭からオンライン的に行っていくことによる、読みの自動化に関する理論的な説明が、認知や記憶における処理と保持のメカニズムの視点からなされた。そのためのトレーニングの仕掛けとしての、速読と繰り返し読みの有効性に関する説明がされた後、清泉女子大学のCALL教室での、発表者の英語のクラスでの事例が紹介された。クラスでは、ブラウザーベースのプログラム上で、チャンクを順番に表示していき、強制的にオンライン処理をさせていくのだが、時間を計測しながらの読みと、速さを設定して自動的に表示していく読みが組み合わせられ、また、前後の文脈を利用した自然な読み近づけていく段階的な工夫もされている。フロアからは、トレーニングの効果やチャンキング自体のトレーニングに関する質問などがあげられたが、前者の効果検証に関しては、現在データを整理中であるとのことであった。

□Session 10 「放送通訳:時差通訳の教授法」(稲生 衣代)

ワークショップの最後の発表で、まず放送通訳全般について説明があった上で「時差通訳」の定義(一定の時間内に日本語に訳出し、素材に合わせてボイス・オーバーする)が示された。次に、他の分野の通訳者と違って、放送通訳者には(1)[時事的な問題に関する]背景知識(2)放送のルール、および(3)[一般視聴者を配慮した]表現力の3点がとりわけ重要だと思われるとの説明があった。

放送通訳クラスの標準的な進め方を明らかにした後に、時差通訳指導法の一例を紹介。時差通訳の指導において、視聴者にわかりやすく伝えるために「編集」を余儀なくされる時差通訳の客観的な評価が難しいことが指摘された。

それに対して、ワークショップ参加者から「通訳者が伝える情報量や聞きやすさは永遠の課題かもしれない」「訓練というのはそれを発見していく過程だ」「視聴者層がはっきりすれば、どの程度編集すればよいのかわかるのではないか」といった意見が

出された。

(所感)

今回の「通訳教授法ワークショップ」では、昨年度に引き続き、まず発表者が約 1 時間ほどのプレゼンテーションをし、その後、そのテーマに沿って参加者が質問し討論するという形式がとられた。前回のワークショップでは大学や通訳学校などでどのようにして授業を進めているのかという実践面に着目した報告が多かったが、今回は理論面に光を当てた発表が目立ち、予定の時間を超えて白熱した意見交換が続いた。

普段、他の教育機関での教授法について直接触れることがない教員が、このようなワークショップにて報告を聞き、議論を進めることで、さらにより効果的な教授法の確立に向け一歩前進したものと感じた。また、今回のワークショップは最先端の CALL 教室を使って行われたことから、通訳理論のみならず、語学教育全般における教育環境としてのハードウェア、およびこれを支えるテクノロジーの水準が通訳教授法そのものに与える影響についても、今後研究を進めていく必要があることを改めて考えさせられた。

最後に、今回の会場を提供していただいた青山学院大学の関係者の皆様、とくに休日にもかかわらず技術サポートに当たってくれた同大学外国語ラボの益子さん、およびワークショップ開催のために奔走された染谷先生を始めとする学会関係者の皆様はこの場を借りて改めてお礼を申し上げたい。なお、各発表の概要についてはそれぞれの発表者に内容を確認していただき、本郷、河原、渡部、長沼の 4 氏については本稿掲載用に別途お書きいただいた原稿をほぼそのまま掲載した。ただし、最終的な文責は筆者のものであることをお断りしておきたい。

筆者紹介： 稲生衣代 (INO Kinuyo Yoshida) 通訳者、青山学院大学講師 (非常勤)。タフツ大学フレッチャー・スクール法律外交大学院修了。CNN、NHK 等の放送通訳を中心に、およそ 20 年にわたり通訳者・翻訳者として活動するかたわら、通訳学校において指導にあたり、現在に至る。この間、テレビ朝日や CNN でニュース・キャスターも務める。

通訳教授法ワークショップ 2003

日本通訳学会 教育 SIG 「通訳教授法および教材開発研究プロジェクトチーム」主催

日程	2003年8月31日(日)～9月1日(月)
参加費	無料(ただし参加にかかわる実費は自己負担)
参加資格	日本通訳学会会員(「通訳教授法および教材開発研究プロジェクトチーム」メンバー)
会場	青山学院大学(渋谷キャンパス)15号館507教室
参加予定者	(両日参加)鶴田知佳子、河原清志、稲生衣代、柴田バネッサ清美、渡部富栄、柴原智幸、染谷泰正、永田小絵(31日のみ参加)本郷好和、田中深雪、鳥飼玖美子、(敬省略:受付順)
発表担当	以下の担当予定はこちらで適当に割り振ったもので、暫定版です。担当スロットの変更のご希望があれば早めにお知らせください。なお、昨年と同じく、発表形式はとくに指定しませんが、題目および簡単な概要をあらかじめ染谷までお知らせください。配布資料などは原則として各発表者が用意するものとさせていただきます。
使用可能機器	CALL 設備のほか、カセットデッキ、ビデオデッキ、DVD、書画カメラ、プロジェクターなどがあります(同時通訳ブースは準備中のため使用不可)
その他	1) 1日は日曜日のため冷房がありませんので、暑いかもしれません(*_*) 2) 小沢初恵さんが、都合がつけば参加したいとのことです。

1日目：8月31日(日)

集合	12:45	--
[S1]	1:00-2:00	染谷泰正「CALLシステムによる通訳訓練について」
[S2]	2:10-3:10	田中深雪「初級レベルの学生へのシャドーイングの導入方法についての一考察」
休憩	3:10-3:30	--
[S3]	3:30-4:30	本郷好和「通訳訓練におけるコンテキストについての指導」
[S4]	4:40-5:40	河原清志「認知意味論による通訳・翻訳の訳出指導」
6:00-	解散	夕食・懇談会(自由参加)

2日目：9月1日(月)

集合	9:45	--
[S5]	10:00-11:00	永田小絵「通訳訓練手法を応用した中国語会話クラスの口頭練習」
[S6]	11:10-12:10	柴原智幸「メッセージを伝達するための訳出指導」
昼食	12:10-1:30	--
[S7]	1:30-2:30	渡部富栄「機能文法の視点からの訳出指導」
[S8]	2:40-3:40	鶴田知佳子「セレスコピッチの通訳教育論について」
休憩	3:40-4:00	--
[S9]	4:00-5:00	長沼君主「CALLによるチャンクリーディングのトレーニング」
[S10]	5:10-5:40	稲生衣代「放送通訳：時差通訳の教授法」
解散	--	--

[連絡先]

染谷泰正 <someya@kamakuranet.ne.jp>

青山学院大学 文学部英米文学科

〒150 渋谷区渋谷 4-4-25

研究室: G1012 (15号館ガウチャーホール)

電話: 03-3409-8279